opusdei.org

年間第5週・月曜日 37.社会の中で生きる

年間第5週・月曜日 37. 社会の中で生きる — 人間の社会性。 — 愛徳と人間の連帯。信者の生活における一貫性。 — 共通善への貢献。

2024/04/09

年間第5週・月曜日

37. 社会の中で生きる

一人間の社会性。

- 愛徳と人間の連帯。信者の生活に おける一貫性。
- 一共通善への貢献。

37.1 人間の社会的な面

聖書の最初のページに、世界の創造 が単純ではありますが、壮大に描か れています。そして、「神はそれを 見てよしとされた…」。 すべては 神の手から創造されたのです[1]。神 はご自分がお創りになったすべての ものの仕上げとして、最後に人間を お創りになりました。しかも、ご自 分に似せてお創りになりました[2]。 聖書によれば、神は、人間に超自然 の賜物と特権をお与えになり、永遠 不滅の幸せを約束されていたことが わかります。また、聖書を読むと、 すべての人は、アダムとエバの子孫 であることもわかります。二人は、 創造主から離れましたが、神の子で あることには変わりなく、神はもう 一度主との友情を取り戻すように定

められました^[3]。神は人類の保存と繁殖に貢献することをお望みになり、人間に大地を与え司らせるためにお呼びになったのです。そして、地を満たし、地を支配するよう、お望みになったのです。「海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」^[4]。

神はまた、人間同十の関係を、偶発 的でその場限りものではなく、社会 生活で安らぎを与えるほどのまさに 大黒柱になるほどの強くて永続的な 絆を築くことを望まれました。もし 生活の必需品や生活の品位を保つた めに必要なものがいるのなら、お互 いに助け合うはずです。というの も、神の摂理によって人間性は、家 庭や社会生活において、生まれたと きから互いに連帯し一致するように 創られているからです。このような 連帯を通して、人は生活必需品を手 に入れるのです^[5]。 第二バチカン公 会議によると、「人間はその本性の 内奥から社会的存在であり、他者とのかかわりなしには生きることもできない」質を開花させることもできない目が自分の目が高さない。 「社会は、人間が自分の目的で達成するために活用することがでなるがでなるがです。 「温」では、活用すべき手段です」である。 は、主に仕えるように望まれたは、この日常の場なのです。

社会で生活することで、普段の生活 も超自然の生活を成長させていくた めに必要な物的・霊的な手段を手に 入れやすくなります。他の人と生活 することで多くの良いこと、利点が ありますが、同時にどんな環境にい ようが常に家族の中での自分の立 場、あるいは社会生活、近所付き合 い、職場などでも、その中で自分の 立場を考える義務が生じます。この 義務は、人間の最終目的である神と 人間の関係なので道徳的な意味合い を持ちます。この義務を守ることで 神にさらに親しくなることもできま

すし、反対に守れなければ神から遠 く離れることになります。

神は、私たちを、人々と共存し、小 さくても大きくても善に貢献できる ことをただ為すように呼ばれていま す。この祈りの中で、私たちが他の 人、特に神が私たちの身近に置かれ た人々に心を開いているかどうか糾 明してみましょう。いつでも私たち が人のために手が空(あ)いているよ うにしているかどうか考えてみるべ きです。つまり、家族や社会の義務 の果たし方で良い模範を与えている かどうか。その時その時何をするべ きかわかるために、そして、犠牲の 精神をもって最後まで勇気を持って 完全に仕上げるために、神に光を 願っているかどうか。また、次のよ うにしばしば自問するべきです。他 の人々のために私は何ができるで しょうか。他の人を慰め助けるため にどんな言葉を言うことができるで しょうか。人生は過ぎていきます。

「もし私たちが神を愛しているののない。過ぎ去った日々に、私たちののたい。必要ないるののでは、必要ないで、必要ないでででではないででは、さいではいるでででしょう」 [8] 。のまれるではることではいるという。のまるといるではない。私たちが、血縁の人や同郷の人

や同僚に、友情を通して無関心に なったり、背を向けたりすることが 決してないようにと頼みましょう。

3 7.2 愛徳と人間の友情。キリスト者の生活の重要性

神のみ旨である私たちのこの連帯と 相互依存は、イエス・キリストが受 肉の瞬間に受け取った人間性を身に つけられた時、そして十字架上で全 人類の救い(贖い)が実現した時 に、確認され、強められました。こ のことは、一致への新たな要求で す。神の子である人類は、兄弟とし て創造されているからです。だか ら、私たちは毎日自分の近くを通り すぎる人全員に関心を持つべきで す。神の子であることの素晴らしさ に気がついていないか、もしかした ら父なる神に反抗している人がいる かもしれません。でも、あらゆる事 の中、神的な事から最も離れ反抗し ているような、最も醜い事の中にさ

え、神の偉大さが光っているものです。もし私たちが見る目を持っているなら、素晴らしい人々に囲まれていることに気づくでしょう。そして彼らが、自分の起源がどこにあり、自分の尊厳に責任を持つことが大切くよう、私たちが助けることが大切です^[9]。

更に、ご受難の前夜、主は私たちに 新しい掟を残されました。それは、 どんなに英雄的な勇気が要求されよ うが、分裂を引き起こす悲嘆や立 腹、恨みのようなものをはるかに超 える掟です。「わたしがあなたがた を愛したように、互いに愛し合いな さい。これがわたしの掟である | ^[10]。即ち、限度を設けたり、言い訳 をして人を無視したり、冷淡に扱っ たりしないということです。私たち の人生は、社会の中で生活するため のしっかりとした理由が十分にある わけです。私たちが、キリスト者と して行動すればするほど、社会は

もっと人間らしくなります。私たち人間は、砂浜の砂粒のようにばらばらでお互い何の関係もないものではありません。それどころか人としてお互いに自然の絆で結ばれ、キリスト者として超自然の絆でも結ばれているのです[11]。

道徳で大切な部分は、全人類の共通 善に触れる義務と関係しています。 その善とは、住んでいる国の善、勤 め先の会社の善、自分が所属する地 域の善、一番の関心事である家族の 善ですが、それは自分がどの立場で その中にいようと追求されるべきも のです。ただその義務が、自分に とって個人的に役に立つか利益のな いものかだけで判断するのはキリス ト教的ではないし、人間としても理 にかなったものではありません。神 は社会とその社会を構成する一人ひ とりを良くするためにお互いに自分 の可能性に従って努力することを私 たちに望んでおられます。

使徒職と兄弟愛は、神のみ旨のなか で人間にとってとても本質的なもの なので、付き合っている人や一緒に 暮らしている人たちとの絆がなくな れば、神に対してどんな申し開きも できなくなります。もし自分の周り の人といかなる形にせよ決別した り、公的、社会的な徳を実行しない ならば、神はお喜びにはならないで しょう。兄弟である人々を見て、出 会いを求めて来られるキリストに気 がつかなければなりません。誰の生 活であっても、決して孤立したもの ではなく、周囲の人々の生活と密接 に結びついています。どんな人もば らばらに孤立した一行詩ではなく、 皆が「神の詩」の一部を構成してい ます。私たちの自由意志に基づいた 協力をえて、神はそれを書き上げて いかれるのです[12]。

念祷で私たちがどのようにこの共通 善に貢献しているか糾明してみま しょう。社会人として、市民として

37.3 共通善への貢献

社会の発展はそれを構成する人たちの貢献によります。人は、神からいただいた才能に加えて、知性を磨いてその才能を伸ばし、神からいた恵みと社会からの援助のお陰で社会に貢献しているのです。私たちがこのような恩恵と才能を生まれながらに備えているのは、自分の人格

を成長させ、最終的な目標に到達するためです。それだけではなく、隣人に仕えるためにも与えられているのです。もし、その人たちの善のために献身しなければ、決して最終目的に到達できないでしょう[13]。

社会の発展が、神のご計画にとって重要なものならば、一人ひることり個としていることを協力してきないのできないのであるというにとのであるというにものであるというにものではない。相互をはないを通したがではないを通しているではないを通しているができる「14」。

義務の中には色々な形をとって厳しい正義を実行することになるものもありますし、中には義務をはるかに超えてお互いに愛徳を実践する必要があるものもあります。どちらの義

務も私たちが共通善に貢献する度に 果たされます。例えば、人々の生活 条件の改善に役立つ私的または公的 制度を促進し援助することで[15]、私 たちが生活している社会がもっと人 間らしいもの、キリスト教的になる のです。慈善や教育の事業、文化的 な事業、健全な教義に関する出版事 業などがあります。なぜなら、寛大 な意見を公言しながら、実際には社 会の種々の必要については、何の配 慮もしないような生活を続けている 人がいます。そのうえ、色々な地域 で多くの人は社会的法律や条令をほ とんど無視している^[16]。 これは、自 分の兄弟である隣人と神に背を向け ていることです。

神のみ前で私たちの周りにいる人々について考えてみましょう。社会の善のために行われている施設や施設の仕事に自分の仕事を割くことで、 共通善を高めるためにできる限り貢献しているでしょうか。時間だけで

なく、経済的な支援、特に困難の中 にいる人々を、イニシアティブを もって助けることでも貢献している でしょうか。社会の一員として生活 する中で生じる義務を忠実に果たし ているでしょうか。例えば、騒音や 衛生面などに関してどうでしょう か。他の人を快くさせる徳、愛想の よさ、感謝、楽観主義、時間厳守、 秩序などを家族の中で実行していま すか。他の人に仕えたいという思い で心を働かせていますか。「日々、 人々のことを考えて生きるように なって欲しい。自分のいることを忘 れてしまうほど献身的になって欲し いものだ | ^[17]。こうすれば、この地 上で手に入れることのできる幸せの 大部分を見つけたことになり、神の 子であり兄弟のように手を貸してあ げたことになるでしょう。

^[1] 第一朗読、奇数月、創世記1・1 参 照

- [2] 創世記 1・27 参照
- [3] 創世記 12 参照
- [4] 創世記 1 · 2 8
- [5] レオ十三世 回勅『インモルタレ・ デイ』1885年11月1日
- ^[6] 第二バチカン公会議 現代世界憲章 12
- ☑ ピオ十一世 回勅 『ディヴィニ・ レデンプトリス』1937年3月19日
- _ ロペス パルド、『Sobre la vida y la muerte』Rialp Madrid 1973年、 438ページ
- ^[9] ロペス パルド、『Sobre la vida y la muerte』Rialp Madrid 1973年、 346~347ページ
- [10] ヨハネ 15・12

- [11] レオ十三世 回勅『スムミ・ポンティフィカツス』1939年10月20日 参照
- ^[12] 聖ホセマリア・エスクリバー 『知識の香』111
- [13] レオ十三世 回勅 『レノム・ノ ヴァルム』1881年9月5日 参照
- ^[14] 第二バチカン公会議 現代世界憲 章 25
- ^[15] 第二バチカン公会議 現代世界憲 章 25
- ^[16] 第二バチカン公会議 現代世界憲 章 25
- ^[17] 聖ホセマリア・エスクリバー 『拓』947

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/TO-V-getsu/ (2025/12/13)